

脳卒中迅速治療連携へ

発症直後の対応が重要とされる脳卒中患者の救急搬送をどうすべきか――。救急車と救急病院などの連携について、現場を担う医師と救急隊員による意見交換会が、広島市中区のホテルで開かれた。患者の7割近くを占め、脳の血管が詰まる脳梗塞への対応などをテーマに、問題点や改善点を出し合った。

医師や看護師のほか、薬剤師、技師らが一体となって行う「チーム医療」を普及させる厚生労働省の事業で、急性期の脳卒中治療を担当した荒木脳神経外科病院（広島市西区、荒木政理事長）が開いた。広島市や府中町など県南西部にある病院の医師や市町の救急隊員ら約70人が参加した。

最も症状が重い救急患者が搬送される施設の一つで、JA広島総合病院（廿日市市）の黒木一彦・

医師と救急隊員が意見交換 中区

脳神経外科主任部長は「病院に到着するまでに容体を判断することが大切」と指摘した。広島市消防局警防部救急課の松永真雄さんは、転んで頭を打って脳内に出血していたり、飲酒の影響があったりする場合を挙げ、「手にまひが出ているどうかなど脳卒中を見抜くために、消防隊員も知識や技術を身に付ける必要がある」とした。

このほか▽休日や夜間に搬送する場合、専門医が到着するまでに救急隊員と病院が緊密に連絡を取り合う▽発症直後に効く血栓を溶かす治療薬が使えるかなど、経過や症状を的確に把握すべき――といった意見が上がった。

荒木理事長は「脳卒中の治療は時間との勝負。質の高い治療を速やかに受けられる医療体制を整えたい」と話していた。



脳卒中患者の初期対応について話し合う参加者（2月27日、広島市中区で）

広島総合病院
脳神経外科 黒木一彦先生

マツダ病院
脳神経外科 尾上亮先生